

## シンポジウム A

### 震災復興に対する沿岸海洋学の貢献

開催日時：2016 年 3 月 14 日（月）9：30～17：30

会場：東京大学本郷キャンパス 山上会館 大会議室

主催：日本海洋学会沿岸海洋研究会

共催：東北マリンサイエンス拠点形成事業

後援予定：環境省

コンビーナー：宮澤泰正(JAMSTEC)・田中潔(東大)・福田秀樹(東大)・木田新一郎(JAMSTEC)

#### 趣旨

東日本太平洋側の沿岸域に未曾有の被害をもたらした東日本大震災（2011 年）から 5 年が経過した。この間、海洋学会では関係諸学会の専門家と緊密に連携しながら、震災復興に資するための様々な活動を実施してきた。本シンポジウムでは、そうした中で沿岸海洋学の専門家が進めてきた研究について、最新の結果を報告するとともに、これまでの成果を統括する。果たして、沿岸海洋学は震災復興に対して、何ができたのだろうか？また、何ができなかったのだろうか？さらに、まだ全く終わっていない震災復興に対してこれから先、何をどうやるべきであろうか？

海洋学の専門家のみならず、関係諸学会所属の専門家、及び普段は海洋学に携わることのない方々にも広く参加していただくことで議論が一層深まることを期待する。

#### プログラム

会長挨拶 (9:40-9:50)：門谷 茂 (北大)

趣旨説明 (9:50-10:00)：宮澤 泰正 (JAMSTEC)

ー東北マリンサイエンス拠点形成事業からー

座長：福田 秀樹 (東大)

1. 三陸沿岸の流況

(10:00-10:30) 田中 潔 (東大)

2. 三陸沿岸の栄養塩

(10:30-11:00) 福田 秀樹 (東大)

3. 三陸沿岸の藻場

(11:00-11:30) 小松 輝久 (東大)

4. 三陸沖の瓦礫と生態系

(11:30-12:00) 土田 真二 (JAMSTEC)

休憩

ー福島事故関連の研究からー

座長：木田 新一郎 (JAMSTEC)

5. 東北地方沿岸 50km 圏内における 2011 年 4-7 月の福島事故由来放射性セシウムの動態  
(レビュー)

(13:30-14:00) 熊本 雄一郎 (JAMSTEC)

6. 放射性物質と生態系

(14:00-14:30) 石丸 隆 (海洋大)

7. 放射性物質の分散シミュレーションに影響を及ぼす沿岸変動過程とその再現性

(14:30-15:00) 升本順夫 (東大)、津旨大輔 (電中研)、郭新宇 (愛媛大)、内山雄介 (神戸大)、  
宮澤泰正 (JAMSTEC)

休憩

8. マルチクラス懸濁質輸送モデルによる福島沿岸域堆積物シミュレーション

(15:15-15:45) 内山 雄介 (神戸大)

9. 魚類の汚染機構

(15:45-16:15) 重信 裕弥 (水研センター)

まとめの討論 (16:15-16:45) 座長：宮澤 泰正 (JAMSTEC)・田中 潔 (東大)

## シンポジウム B

大気海洋間物質輸送と環境災害問題における波浪と界面微細過程の役割  
—機械工学, 海岸工学, 船舶工学を交えて—

開催日時: 2016 年 3 月 14 日 (月) 11:00~18:05

会場: 東京大学本郷キャンパス 理学部 1 号館 2 階 206 教室

主催: 日本海洋学会

コンビーナー: 田村 仁 (港湾空港技術研究所)・相木 秀則 (名古屋大学)・

鈴木 直弥 (近畿大学)・早稲田 卓爾 (東京大学)

### 趣旨

波浪は大気-海洋間の運動量、熱および物質の輸送を促進する「ギアボックス」としての役割がある。そのため波浪および海面フラックスなどの海面境界過程の物理現象を理解することは台風や気候変動など様々な時空間スケールの大気海洋相互作用現象の解明に極めて重要である。本シンポジウムでは、波浪・界面微細過程とその地球環境・沿岸環境・災害問題への影響に関する研究を海洋学会および機械工学・海岸工学・船舶工学などの関連学会から広く募り、これからの学際的アプローチのあり方を議論する。

### プログラム

- |             |  |                       |
|-------------|--|-----------------------|
| 11:00-11:05 | 趣旨説明   |                       |
| 11:05-11:45 | 室内実験による高風速下での気液界面を通しての乱流輸送現象の解明とモデリング (招待講演)         | 小森 悟 (京都大学)           |
| 11:45-12:10 | 砕波の流体力学  | 渡部 靖憲 (北海道大学)         |
| 12:10-13:00 | 休憩   |                       |
| 13:00-13:25 | 防災情報としての波浪予測とその高度化                                   | 高野 洋雄 (気象庁)           |
| 13:25-13:50 | 船体縦強度とフリーク波の形状                                       | 宝谷 英貴 (海上技術安全研究所)     |
| 13:50-14:15 | Hydrodynamic Breathers Modelling Oceanic Rogue Waves | Amin Chabchoub (東京大学) |
| 14:15-14:40 | 風シア中の運動量フラックスの鉛直構造についての相互比較を促進する                     |                       |

	ために	相木 秀則 (名古屋大学)
14:40-14:55	休憩	
14:55-15:20	風洞水槽実験における可視化計測	水谷 夏樹 (大阪産業大学)
15:20-15:45	高風速下かつ長吹送距離における風波気液界面を通しての物質輸送量の評価	高垣 直尚 (京都大学)
15:45-16:10	台風のマクロ構造におよぼす波浪の影響	森 信人 (京都大学)・二宮順一
16:10-16:35	詳細雲微物理モデルを用いた、波しぶき解像台風シミュレーション	大西 領 (海洋研究開発機構)
16:35-16:50	休憩	
16:50-17:15	漂流型波浪計による外洋波浪の実測および JMA 波浪モデルの検証	轡田 邦夫 (東海大学)・根田昌典・鈴木直弥
17:15-17:40	波浪境界層内の乱流構造に対する波浪の影響	田村 仁 (港湾空港技術研究所)・William Drennan
17:40-18:05	風の海面摩擦係数のモデル化に向けてーブイ・観測塔における海面応力観測手法の検討ー	鈴木 直弥 (近畿大学)・早稲田卓爾

## シンポジウム C

### 光環境を巡る植物プランクトンの生理生態学最前線

開催日時：2016年3月14日（月）9：00～16：30

会場：東京大学本郷キャンパス 理学部1号館 3階 336教室

（関連業者による展示は 理学部1号館 3階 331教室）

主催：日本プランクトン学会

コンビーナー：紫加田知幸（水産総合研究センター 瀬戸内海区水産研究所）・大西紀和（岡山大学）・小池一彦（広島大学）

#### 趣旨

水中の光環境は、天候や透明度によって鉛直方向に大きく変化すると共に、地理的条件や気象条件にも大きく影響を受ける。一方で、植物プランクトンにとって光は、生存のためのエネルギー産生に必須であると同時に、細胞分裂、休眠期細胞の発芽、遊泳など、その生態を理解する上で重要な生理現象の制御にも密接に関与する。そのため、植物プランクトンの生理生態と光環境の関係については長年研究が進められてきた。本シンポジウムでは、光と植物プランクトンの関係について研究する研究者を様々な分野から集め、水圏の光環境がどのようなものであり、そこで生息する植物プランクトンがどのようにふるまっているか、そして植物プランクトンがどのように光を受容し、適応するか、さらにどのような手法で光応答を解析するかについて情報交換し、今後の課題や連携形態について議論する。

#### プログラム

9:00-9:05	開会挨拶（今井一郎 日本プランクトン学会会長）		
9:05-9:10	趣旨説明（紫加田知幸）		
	講演者	所属	タイトル
9:10-9:35	山口一岩	香川大学	沿岸域における光環境に及ぼす植物プランクトンの影響
9:35-10:00	山口晴生	高知大学	有害・有毒微細藻類の光応答増殖
10:00-10:25	小池一彦	広島大学	植物プランクトン調査へのクロロフィル a 蛍光の応用
10:25-10:35	休憩		

10:35-11:00	西山佳孝	埼玉大学	微細藻類における強光阻害現象
11:00-11:25	高橋俊一	基礎生物学研究所	サンゴに共生する褐虫藻の光合成とその重要性
11:25-11:50	大西紀和	岡山大学	屋外環境条件における緑藻の突然変異体を用いた光合成解析
11:50-13:00	昼休憩		
13:00-13:25	松原 賢	佐賀県有明水産振興センター	海産珪藻の発芽・復活および増殖と光環境との関係
13:25-13:50	松永 茂	浜松ホトニクス中央研究所	微細藻類の光運動反応
13:50-14:20	紫加田知幸	瀬戸内海区水産研究所	赤潮藻類における日周鉛直移動に及ぼす光環境の影響
14:20-14:45	若林憲一	東京工業大学	緑藻クラミドモナスの走光性メカニズム：光受容と鞭毛運動の連関
14:45-15:00	休憩		
15:00-15:25	成川礼	静岡大学	シアノバクテリアの光応答戦略
15:25-15:50	高橋文雄	立命館大学	藻類の青色光受容体とそれらの機能
15:50-16:15	亀井保博	基礎生物学研究所	光を使った生物研究技術の紹介と共同利用制度の紹介
16:15-16:25	総合討論 (大西紀和)		
16:25-16:30	閉会挨拶 (小池一彦)		

シンポジウム開催中に、光と植物プランクトンの関係を調べるために必要な光源、光量子センサー、光合成活性計測装置などの展示会も別室にて実施する。旭光通商、ナモト貿易、パイフォトニクス、浜松ホトニクスメイワフォース、CCSが展示予定。

## シンポジウム D

### 潮汐混合が強い海域を利用する海洋生物資源の変動

開催日時：2016年3月14日（月）9：30～18：00

会場：東京大学本郷キャンパス 理学部1号館 小柴ホール

共催：一般社団法人水産海洋学会，日本海洋学会

コンビーナー：志田修（道総研釧路水試），高橋素光（水研セ西水研），安田一郎（東大大気海洋研），伊藤進一（東大大気海洋研）

#### 趣旨

北西太平洋は，海底の起伏が激しく，潮汐と海底地形との相互作用によって比較的大きな鉛直混合が発生し，栄養塩を表層へと輸送することによって，高い生物生産に寄与していると考えられる．潮汐には18.6年という長周期変動があり，乱流混合強度が変動し，そのために海洋構造および栄養塩供給にも変動が発生し，直接的に生物生産に影響を与えている可能性がある．さらに海洋構造の変動が気候変動を引き起こし，間接的に生物生産に影響を与えている可能性がある．本シンポジウムでは，強い乱流混合が起きているホットスポットとして，南西諸島，伊豆海嶺，千島列島周辺に注目し，その海域を利用している海洋生物資源として，マアジ，マサバ，スケトウダラなどに焦点をあて，その資源変動を理解するとともに，潮汐混合との直接的，間接的な関係を考察する．

#### プログラム

挨拶：和田時夫（一般社団法人水産海洋学会長） 09：30～09：40  
趣旨説明：伊藤進一（東大大気海洋研） 09：40～09：50

話 題 座 長：高橋素光（水研セ西水研）

1. 日本周辺の潮汐混合ホットスポットと18.6年振動 09：50～10：15  
安田一郎（東大大気海洋研）
2. スケトウダラの生活史と資源変動 10：15～10：40  
船本鉄一郎（水研セ北水研）
3. 千島列島周辺海域での栄養物質混合と北太平洋亜寒帯域の生物生産 10：40～11：05  
西岡 純（北大低温研）
4. 春季親潮周辺海域における珪藻のブルーム形成とその長期変動 11：05～11：30  
桑田 晃（水研セ東北水研）

水産海洋学会賞授与式 11：30～11：40

－ 昼休み（一般社団法人水産海洋学会評議員会） － 11：40～12：50

座 長：志田 修（道総研釧路水試）

5. 北西太平洋を回遊するマサバの生活史と資源変動 12：50～13：15

上村泰洋（水研セ中央水研）

6. 気象庁137度定線の長期変動からみえてきた伊豆諸島周辺海域に  
おける物質循環の変動 13：15～13：40  
中野俊也（気象庁）

7. 伊豆諸島周辺海域から下流域にかけてのプランクトン生産構造 13：40～14：05  
日高清隆（水研セ中央水研）

8. マアジの生活史と資源変動 14：05～14：30

高橋素光（水研セ中央水研）

9. 南西諸島周辺海域の海水循環，乱流混合と物質循環 14：30～14：55  
中村啓彦（鹿大水産）

－ 休 憩 － 14：55～15：10

座 長：伊藤進一（東大大気海洋研）

10. 黒潮源流域における動物プランクトン生産構造 15：10～15：35

小針 統（鹿大水産）

11. 18.6年潮汐変動から魚類生産までを繋ぐモデリング 15：35～15：55

伊藤進一（東大大気海洋研）

総合討論 15：55～16：25

閉 会：安田 一郎（東大大気海洋研） 16：25～16：30

2016年度一般社団法人水産海洋学会総会 16：40～18：00

## シンポジウム E

### 海洋データ・情報管理の将来を考える －日本海洋データセンター設立 50 年の歴史と今後－

開催日時：2016 年 3 月 18 日（金）13：00～17：40

会場：東京大学本郷キャンパス 理学部 1 号館 小柴ホール

主催：日本海洋学会

共催：海上保安庁海洋情報部，（一財）日本水路協会

コンビーナー：道田 豊（東京大学大気海洋研究所）・鈴木 亨（日本水路協会海洋情報研究センター）・楠 勝浩（海上保安庁海洋情報部・日本海洋データセンター）

#### 趣旨

ユネスコ政府間海洋学委員会（IOC）の主導のもとで、1960 年代から国際海洋データ・情報交換（IODE）事業が進められている。IODE の中核をなす組織として各国の海洋データセンター（NODC）があり、わが国は 1965 年に海上保安庁水路部の一組織として日本海洋データセンター（JODC）が設立された。カウントの仕方にもよるが、現在 80 ほどある各国海洋データセンターのうち、5 番目に設立された歴史を有する。JODC は 2015 年に設立 50 周年を迎えた。JODC は、設立から一貫して、IODE 事業における我が国の窓口機関として、また、世界の中でも有力なデータセンターの一つとして活動を続けて来ている。当初は海洋物理学関連データの管理が中心であったが、着実に取り扱いの範囲を拡大し、CSK（IOC の黒潮共同調査）における黒潮データセンター（KDC）、それに続いて WESTPAC の責任データセンターの役割を担うなど、わが国及び地域の海洋学の発展に貢献して来た。また、2007 年に制定された海洋基本法に基づいて、近年は我が国における海洋情報一元化という政策課題においても中心的役割を担うようになっている。こうしたことを背景として、本シンポジウムにおいては、JODC 設立 50 周年を機に、これまでの同センターの活動を振り返り、今後の海洋データ・情報管理の課題を整理したうえで、将来の方向について本学会内外の関係者による議論を深めたい。

#### プログラム

13:00-13:10 趣旨説明 : 道田 豊（東大大気海洋研）

13:10-13:50 第一部 IODE と JODC 座長：鈴木 亨（海洋情報研究センター）

IODE の現状と課題 : 道田 豊（東大大気海洋研）

JODC の歴史と展望 : 楠 勝浩（海上保安庁海洋情報部・日本海洋データセンター）

13:50-15:10 第二部 国際協力の推進 座長：鈴木 亨（海洋情報研究センター）  
NEAR-GOOS データ管理の現状と展望 ： 大野浩史（気象庁）  
J-OBIS の役割およびデータ管理の現状と展望 ： 伊勢戸徹・細野隆史・藤倉克則・  
園田朗（海洋研究開発機構）  
KODC の活動および JODC との協力 ： So Hee HAN, Sun Hee NA and Joonsoo LEE（韓  
国海洋データセンター）  
科学データ保存事業 ICSU-WDS とオープンサイエンスの国際動向 ： 村山泰啓（情  
報通信研究機構）

（休 憩 ： 15:10-15:20）

15:20-16:20 第三部 データの高度利用と拡充 座長：楠 勝浩（海上保安庁海洋情報部）  
MIRC と JODC の協調と将来 ： 鈴木 亨（日本水路協会海洋情報研究センター）  
衛星リモートセンシングデータの現状 ： 村上 浩（宇宙航空研究開発機構）  
水産分野からの JODC への期待 ： 渡辺朝生（水産総合研究センター）

16:20-17:00 第四部 海洋政策への活用 座長：道田 豊（東大大気海洋研）  
海洋政策における海洋情報一元化の意義と今後の展望 ： 藤田雅之（内閣官房総合  
海洋政策本部事務局）  
海洋情報の産業利用と JODC への期待 ： 中原裕幸（海洋産業研究会）

17:00-17:40 第五部 総合討論 進行：道田 豊（東大大気海洋研）

## シンポジウム F

### 東経 137 度定線の 50 年と今後の日本の持続的海洋観測

開催日時：2016 年 3 月 18 日（金）13：00～17：50

会場：東京大学本郷キャンパス 理学部 1 号館 2 階 206 教室

主催：日本海洋学会

コンビーナー：須賀 利雄（東北大院理/JAMSTEC-RCGC）・岡 英太郎（東大大気海洋研）

石井 雅男（気象研）・中野 俊也（気象庁）

#### 趣旨

「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」の第 4 次、第 5 次評価報告書は、「気候システムの温暖化には疑う余地はない」と結論づけた。海洋は、熱や二酸化炭素を吸収することにより気温上昇を抑える一方、それらの吸収により自身が温暖・酸性化するとともに、海面を上昇させている。海洋の長期変動・変化を正確に把握することは、地球温暖化の将来予測の不確かさを低減するためにも、海洋生態系が受ける影響を評価するためにも、極めて重要である。

日本をとり囲む西部北太平洋およびその縁辺海における海洋の長期変動・変化は、現業官庁（気象庁、海上保安庁水路部、水産庁・各県水産試験場）が長年維持してきた定線観測網のデータから読み解くことができる。中でも、「黒潮及び隣接水域共同調査（CSK）」の一環として 1967 年冬季に開始され（夏季は 1972 年から）、今年記念すべき 50 年目を迎えた気象庁の東経 137 度線は、世界的にも類をみない、日本を代表する定線である。近年、定線観測は縮小傾向にあり、持続的な海洋観測の主役は Argo や衛星のような自動観測プラットフォームに移りつつある。しかしながら、気候変動に関わる海洋の微小な変動を検知し、長期変動・変化の実態とメカニズム解明を進める上で、海面から海底までの物理パラメータのみならず、生物地球化学パラメータも含めた高精度な観測データを取得できる船舶観測の重要性は、現在も微塵も変わるものではない。

2013 年に改定された「海洋基本計画」では、地球規模の環境問題への対応として、引き続き長期モニタリングに取り組むことや、海洋政策の基盤となる海洋調査やモニタリングを戦略的に推進する、と謳われている。国際的には「全球海洋観測システム（GOOS）」が再編され、新たな観測の枠組構築が始まっている。そこで、本シンポジウムでは、研究者のみならず広く一般市民を対象とし、海洋観測の歴史と意義、そしてその中で東経 137 度線での 50 年にわたる観測が果たしてきた中心的役割を振り返るとともに、定線観測を含む今後の日本の持続的な海洋観測のあり方について、手法、学問分野、実施機関を越えたさらなる連携強化を視野に、検討する機会としたい。

## プログラム

1. 趣旨説明：海洋長期変動モニタリングの重要性と東経 137 度定線観測の意義  
須賀 利雄（東北大院理/JAMSTEC-RCGC） 13：00～13：30
  
- 座長：中野 俊也（気象庁）
2. 東経 137 度定線観測の歴史  
中野 俊也（気象庁） 13：30～14：00
  
3. 東経 137 度定線観測の研究成果
- 3.1. 物理パラメータによる海洋構造と長期変動の理解への貢献  
岡 英太郎（東大大気海洋研） 14：00～14：30
- 3.2. 東経 137 度線亜熱帯域での海洋貧酸素化  
高谷 祐介（気象庁） 14：30～15：00
- 3.3. 東経 137 度線における人為起源 CO<sub>2</sub> 蓄積と海洋酸性化の実態  
石井 雅男（気象研） 15：00～15：30
  
- 休憩  
15：30～15：40
  
- 座長：岡 英太郎（東大大気海洋研）
4. 東経 137 度線定線観測と他の観測研究システムとの連携
- 4.1. 東経 137 度定線観測と海洋物理素過程の解明 Bo Qiu（ハワイ大） 15：40～16：10
- 4.2. 東経 137 度定線で同定された 2 種類の亜熱帯モード水  
～アルゴフロートが示す形成域および空間分布特性～  
杉本 周作（東北大学際研） 16：10～16：40
- 4.3. 渦解像モデルによる 137 度線の水塊の起原およびその変動の推定  
中野 英之（気象研） 16：40～17：10
  
5. 総合討論（パネルディスカッション）  
日本の持続的海洋観測に関する今後の展望 17：10～17：50

## シンポジウム G

### 海洋データ同化 20 年の歩みと今後の展望

開催日時：2016 年 3 月 18 日（金）9：00～17：30

会場：東京大学本郷キャンパス 理学部 1 号館 2 階 207 教室

主催：日本海洋学会

コンビーナー：藤井陽介（気象研）・碓氷典久（気象研）・石川洋一（JAMSTEC）・  
高山勝巳（九大）・増田周平（JAMSTEC）・宮澤泰正（JAMSTEC）

#### 趣旨

1995 年に東京で開催された第 2 回 WMO 大気・海洋データ同化シンポジウムにおいて、日本の海洋学者たちはデータ同化が海外で新たな学問として追求されていることに大きな衝撃を受け、このことは日本で本格的な海洋データ同化研究が開始されるきっかけとなった。それから 20 年あまり、日本の海洋データ同化研究は大いに進展し、2004 年の黒潮大蛇行の予測、世界で唯一の 4 次元変分法結合データ同化システムの開発など、様々な成果を上げた。これらの成果が、海面高度計、アルゴフロート、TAO-TRITON アレイなど海洋観測システムの継続的な発展に支えられていたことも忘れてはならない。

データ同化研究のこれまで 20 年の進展をさらに継続させるためには、昨今顕在化しつつある新しい課題に取り組んでいかなければならない。例えば、海洋データ同化システムのさらなる高解像度化のためには HF レーダーや面的海面高度計などによる新たな観測データの同化が不可欠である。気象予測と気候変動予測のシームレス化のためには、結合同化技術のさらなる深化が期待される。また、大容量で高精度な海洋再解析データを有効活用するためには、多くの研究者とそのデータを共有しその活用の成果についてフィードバックが得られるような体制の構築が求められる。そこで、本シンポジウムでは、日本における海洋データ同化研究 20 年の歩みと、その成果が、海洋学の他、水産、気象、防災、沿岸保全、海運、資源開発、レジャーなど様々な分野で活用されつつある現状について総括し、上記の課題について他分野の研究者も含めて総合討論を行うことにより、今後の発展に資する。

#### プログラム

##### 第 1 部：日本海洋データ同化研究 20 年の歩み

座長：碓氷典久（気象研）

09:00～09:05 趣旨説明 ○藤井陽介（気象研）

09:05～09:35 「日本の海洋データ同化を導いた海神と羅針盤」 ○蒲地政文（気象研）

09:35～09:55 「日本海・東シナ海海況予測の発展」 ○広瀬直毅・高山勝巳（九大）

09:55～10:15 「ENSO 予測の進展と海洋データ同化」 ○藤井陽介（気象研）

10:15～10:35 「気候変動に対する 4 次元変分法結合同化システム開発への挑戦」 ○望月 崇

(JAMSTEC)

(10:35~11:00 休憩)

**第2部：海洋統合データセットの作成とその利用** 座長：高山勝巳（九大）

11:00~11:20 「JCOPE 再解析：高分解能海洋再解析データで広がる研究」 ○美山透・宮澤泰正・Sergey Varlamov (JAMSTEC)

11:20~11:40 「海況予測モデル FRA-ROMS の開発と活用」 ○瀬藤聡\*<sup>1</sup>・黒田寛\*<sup>2</sup>,\*<sup>1</sup>・東屋知範\*<sup>2</sup>・笈茂穂\*<sup>3</sup>・奥西武\*<sup>3</sup>・長谷川大介\*<sup>3</sup>・伊藤進一\*<sup>4</sup>・稲掛伝三\*<sup>1</sup>・廣江豊\*<sup>1</sup>・清水勇吾\*<sup>1</sup>・清水学\*<sup>1</sup>・青木一弘\*<sup>1</sup>・岡崎 誠\*<sup>1</sup>・森永健司\*<sup>5</sup>,\*<sup>1</sup>・種子田雄\*<sup>6</sup> (\*1 中央水研, \*北海道区水研, \*3 東北水研, \*4 東大大気海洋研, \*5 国際水研, \*6 西海区水研)

11:40~12:00 「4次元変分法による海洋長期再解析データ：FORA」 ○広瀬成章・碓氷典久（気象研）・田中裕介・若松剛（JAMSTEC）・FORA プロジェクトチーム

12:00~12:20 「気候変動研究の為に長期全球海洋環境再現データセット ESTOC の現状と今後の展望」 ○長船哲史・増田周平・杉浦望実・土居知将（JAMSTEC）

(12:20~13:30 昼休憩)

**第3部：新たな課題への取り組み** 座長：石川洋一（JAMSTEC）

13:30~13:50 「アジョイント感度解析を用いた深海型アルゴフロートの効率的展開に関する研究」 ○増田周平・長船哲史・杉浦望実・土居知将（JAMSTEC）

13:50~14:10 「A multi-model ensemble approach to assessment of the water budget in the Pacific-Asian marginal seas」 ○韓修妍（九大）

14:10~14:30 「極域における海洋・海氷データの同化について」 ○豊田隆寛・藤井陽介・碓氷典久・広瀬成章・高槻靖・倉賀野連（気象研）

14:30~14:50 「J-COPE の最近の取り組み」 ○宮澤泰正（JAMSTEC）

14:50~15:10 「海洋再解析 MOVE・FORA を活用したアカイカ漁場予測」 ○五十嵐弘道\*<sup>1</sup>・西川悠\*<sup>2</sup>・齊藤誠一\*<sup>3</sup>・酒井光夫\*<sup>4</sup>・今村豊\*<sup>5</sup>・FORA プロジェクトチーム (\*1 JAMSTEC, \*2 Rutgers 大/JSPS, \*3 北大水産科学院, \*4 東北水研, \*5 青森県産業技術センター水産総合研究所)

15:10~15:30 「海洋生態系生物変数のデータ同化に向けて」 ○干場康博\*<sup>1</sup>・平田貴文\*<sup>2</sup>・中野英之\*<sup>3</sup>・重光雅仁\*<sup>4</sup>・橋岡豪人\*<sup>4</sup>・増田良帆\*<sup>2</sup>・山中康裕\*<sup>2</sup> (\*1 東大大気海洋研, \*2 北大院地球環境, \*3 気象研, \*4 JAMSTEC)

(15:30~16:00 休憩)

**第4部：今後のデータ同化研究のための提言** 座長：藤井陽介（気象研）

16:00~17:30 パネルディスカッション

## ナイトセッション A

### 海洋若手研究者の会—研究者間ネットワークの構築と強化—

開催日時：2016年3月15日（火）18:10～20:15

会場：東京大学 理学部1号館7階710教室

主催：日本海洋学会・海洋若手研究者の会

コンビーナー：土屋 健司（創価大学）、鈴木 健太郎（電力中央研究所）、青木 一弘（水産総合研究センター）、宮本 雅俊（東大大気海洋研）

#### 趣旨

現在、海洋に関わる科学的な問題を、物理、化学、生物など様々な観点から捉え、解決することが求められている。その中で、高い機動力と柔軟性を合わせ持つ若手研究者の役割は大きく、また、日比谷会長が今後も充実させるべき事業の筆頭に若手研究者支援が挙げられているように、若手研究者に大きな期待が寄せられている。このような背景のもとで、海洋学研究者を志す学生から博士号を持つ若手研究者までの世代により、異分野間で議論を行い、問題解決に必要な研究をボトムアップ的に提案・実行していく場として、海洋若手研究者の会は2013年に設立された。今回のナイトセッションでは、若手研究者がお互いの研究を知ることや議論を通じて研究者間ネットワークの基盤強化を試み、連携研究への発展の可能性を模索することを目的とする。

#### プログラム

18:10~18:15 趣旨説明 青木 一弘

18:15~20:10 研究紹介および分野横断的共同研究に関するパネルディスカッション  
総合司会：土屋 健司、鈴木 健太郎、宮本 雅俊

- 参加者に簡単な研究発表を行っていただきます（1人3～5分程度）。
- 分野横断的共同研究を行っている研究者に、話題提供を行っていただきます。
- 上記の発表者をパネラーとして、共同研究がキャリアパスに与えた影響や、参加者間の共同研究の可能性等について、聴衆を交えた意見交換を行います。

20:10~20:15 アンケートと今後の活動についての議論

\*必要に応じて、各自で軽食をご用意ください。

\*ナイトセッション終了後に、周辺で懇親会を行います。奮ってご参加ください。

## ナイトセッション B

### 新たな水質基準の導入と海域管理 ―海洋環境問題研究会―

開催日時：2016年3月15日（火）18：15～20：15

会場：東京大学本郷キャンパス 理学部1号館 3階 336教室

主催：日本海洋学会海洋環境問題研究会

コンビーナー：速水 祐一（佐賀大学低平地沿岸海域研究センター）

野村 英明（東京大学海洋アライアンス/大気海洋研究所）

#### 趣旨

環境省は、2015年8月に内湾や湖沼などの閉鎖性水域に関する水質保全に係る生活環境の保全に関する環境基準の見直しを行い、底層溶存酸素量を生活環境項目環境基準とし、また透明度を地域において設定する目標とすることを発表した。地域目標値の決め方など、今後新環境基準の設定に関する合意の形成は、海域の総合的管理のあり方にも影響すると考えられる。行政によって継続されているモニタリングデータを活用し、科学的合理性のある環境評価の上で有効利用するためには、今後さらなる議論も必要であろう。そこで本ナイトセッションでは、新たな水質基準導入の経緯・基準値の設け方等に関して情報共有を進めると共に、複数の海域の事例を織り交ぜながら、海域管理を踏まえた活発な意見交換を行いたい。

#### プログラム

閉鎖性水域の新たな水質基準について

実海域における事例1 東京湾

実海域における事例2 有明海

閉鎖性水域の総合的・海域管理と新水質基準

総合討論

## 海洋教育特別イベントー普及・実践のためのネットワークづくりー

開催日時：2016年3月15日（火） 10：00～17：00

16日（水） 9：30～17：00

会場：東京大学本郷キャンパス 理学部1号館 小柴ホール前ロビー（ポスター第2会場）

主催：教育問題研究会・東京大学海洋アライアンス・海の自然史研究所

コンビーナー：響田 邦夫（東海大海洋）・丹羽 淑博（東大海洋アライアンス）・今宮 則子（海の自然史研究所）

**趣旨** 教育問題研究会は、日本海洋学会のアウトリーチ活動の増進および海洋学の普及には、学会員が小中高等学校教職員・理科支援員および水族館・博物館などの社会教育施設従業員で海洋教育に携わる非会員と「海洋教育実践」に関わる情報を交換する場として、学会員以外でも発表可能なオープンポスターセッションを開設する必要があると考えている。2016年度春季大会では、上述の趣旨に基づき東京大学海洋アライアンスおよび海の自然史研究所との共催で、以下のポスター発表および実演を主とした海洋教育イベントを開催する。これによって、小中高等学校などの教育現場や社会教育施設において、日本海洋学会に求められているニーズおよび日本海洋学会が貢献できるシーズを明らかにしていく一歩とする。

※ 非会員も発表および参加が可能なポスターイベントとして開催する。

### プログラム

#### 1) 教育問題研究会会員によるアウトリーチ活動の紹介

海のサイエンスカフェ	上野 洋路 他
有明海科学教室 「もっと知りたい！有明海の不思議」	藤井 直紀 他
海洋リテラシー調査の結果の概要	丹羽 淑博 他
女子中高生夏の学校	大林 由美子 他
日本学術振興会 事業「ひらめき☆ときめきサイエンス」	響田 邦夫 他
大学施設を利用した海洋教育の実践（横浜国大・環境センター）	菊池 知彦
海洋教育を普及するための人材育成と教材提供のとりくみ	今宮 則子 他

#### 2) 博物館・水族館員による自身が所属する社会教育施設における活動の紹介

葛西臨海水族園  
すみだ水族館  
しながわ水族館  
新江の島水族館  
東海大学海洋科学博物館

#### 3) 小学・中学・高校における海洋教育にかかわる活動の紹介

逗子開成中学校	密度成層の水槽実験
逗子開成中学校	深層循環の水槽実験
日比谷高校	津波シミュレーションの授業
大島海洋国際高校	沖ノ鳥島定期観測